

感性の言語学 1 ——オノマトペ再考

仲 本 康一郎

要 旨

認知言語学によって、人間の言語は抽象的な記号系ではなく、われわれの身体やその活動に根ざすものであることがわかってきた。しかし、現在までの身体性の議論では、日本語でいう「感性」の側面は等閑視されている。本研究では、こういった経緯を踏まえ、認知言語学の新たな研究領域として“感性の言語学”を展開する¹。今回は、感性の言語学の研究の第一歩として、日本語のオノマトペの研究動向を整理し、新たな研究の方向性を提示する。特に、オノマトペの持つ特徴的な性質である、類像性、身体性、全体性の三つを認知言語学の観点から多角的に分析し、今後の認知言語学が向かうべきオノマトペ研究の指針を示す。

キーワード：オノマトペ、類像性、身体性、からだ的思考、全体性

1. はじめに

夜空に瞬く星を擬態語で「びかびか」ということもあれば、形容詞で「明るい」ということもある。従来は、擬音語や擬態語は、子どもが用いる稚拙な表現として言語学の対象になることは少なかったが、最近は認知言語学や認知心理学の研究の高まりにともない、擬音語・擬態語と他の一般的な表現の間には、われわれの認知的な捉え方に関する重要な違いがあるといった主張が展開されるようになってきている。

本稿は、感性の言語学の初回として、日本語のオノマトペを取り上げる^{2 3}。オノマトペ（模写語）とは、一般に「言語音の模倣によって外界の出来事や状態を模写する表現」とされる。具体的には、物理的な音や動物の鳴き声などを模写する擬音語・擬声語だけでなく、事物や生物の運動、状態などを象徴的に表わす擬態語、さらに、日本語の場合、人間の感情や態度を表わす擬情語などがふくまれる。

本稿は、現在までのオノマトペ研究の動向を整理し、新たな研究の方向性を提示することを目的とする。特に、本稿では、オノマトペが備える特徴として、類像性（形式と意味が関連性を持つこと）、身体性（身体的な知覚や運動を反映すること）、全体性（状況や場面の全体を概念化すること）という三つの特徴を提示し、これら三つの特徴を認知言語学の観点から考察していく。

¹ 「感性の言語学」は語感や文体論の分野ですでに提唱されている（堀井 1996 等）。ここでは、そういった成果を参照しつつ、認知言語学の観点から理論的な考察を進める。

² 日本語の擬音語・擬態語に関する言語学の成果としては、Hamano (1998)、田守・スコウラップ (1999)、角岡 (2007) が包括的かつ詳細な記述を行っている。本稿の記述的な内容は、これら三つの研究に負うところが大きい。

³ 個々の擬音語・擬態語の辞書的な意味・用法に関しては、阿刀田・星野 (1993)、飛田・浅田 (2002)、山口 (2003)、小野 (2007) を参照した。

2. オノマトペと言語の類像性

ソシュールの言語論以来、言語記号が備える形式と意味には、有意味な関連性はなく、ただ慣習によって結びついているという言語の恣意性が言語学の前提とされてきた。しかし、ソシュールも当初から、すべての言語記号が恣意的であるという強い主張をしていたわけではなく、擬音語・擬態語や感動詞など、言語形式とその意味に密接な関連があるものがあることを指摘している (Saussure 1916: 99)。

こういった恣意性を越えた言語現象のうち、一般に、言語の形式と意味が同型的な対応をなす場合を、言語の類像性 (iconicity of language) といい⁴、そのうち音と意味が直接的な対応を示す現象を音象徴 (sound symbolism) と呼ぶ (Hinton, Nichols and Ohara 1994)。ここでは、日本語の音象徴体系を包括的に論じた Hamano (1998) と田守・スコウラップ (1999) を参照し、日本語の音象徴を共感覚現象 (synesthesia) のひとつとして分析する。

2.1 共感覚現象とオノマトペ

音には意味がある。これは言語以前の世界で成り立つ言明である。例えば、丸太のような大きなものが転がるときは大きな音がするが、鉛筆のような小さなものが転がるときは小さな音しかしない。このように、環境のなかで生じる音と、その原因となる事物や事象は直接的な対応を示す。こういった自然界の音と、外界の出来事との対応は、オノマトペに代表される言語音にも積極的に利用される。

以下の図形を見てみよう。われわれは、これらの図形を見て、どちらが「ブーバ」でどちらが「キキ」かと尋ねられたとき、即座に答えることができるのではないだろうか (Ramachandran 2003: 110)。これは言語的な音声が特定の感覚的な印象を生じさせるためであると考えられる。この場合、キキという「鋭い」音声とブーバという「鈍い」音声とが、それぞれ外界の視覚的な映像と対応をなしている。



図1. どちらがブーバでどちらがキキか

つまり、知覚は感覚内で閉じておらず、他の感覚へと拡張していく共感覚という性格を備えている⁵。共感覚については形容詞の共感覚表現が広く知られているが、擬音語・擬態語もさまざまな感覚を聴覚へ写像する共感覚に根ざす現象と言える。例えば、[p, b] は破裂や爆発といった現象を、[k, g] はかたい表面との接触を、[s, z] は摩擦感や障害の欠如を象徴的に表わすといった傾向がある (山梨 1988, Hamano 1998, 田守・スコウラップ 1999 等)。

⁴ 言語の類像性としては、「ながーい、ながーい釣竿」のように、音声的な音の長さや釣竿の物理的な長さが対応すること、また「どこを見ても人、人、人」のように混雑する人々の様子が言語形式の反復によって表わされるなどの現象がある (山梨 1995: 128)。

⁵ Meltzoff and Borton (1979) は、二種類のおしゃぶりをを用いて、乳児が視覚と触覚という二つの感覚を統合する能力を持つことを実験的に示している。

また日本語の母音でも /a/ は平面的、/i/ は直線的、/u/ や /o/ はまるい事物を象徴的に表わす (Cf. 田守・スコウラップ 1999:126)⁶。これは「ばさっと敷物を広げる」「びしっと亀裂が入る」「ぶすっと風穴を空ける」等の対立を考えてみればわかる。こういった母音の音象徴は、母音を発音する際の口形と事物の形状の同型性に基づくものと考えられる。またこのことは、人間は聴覚だけでなく、視覚的な情報によって言語音を知覚するという“マガーク効果”とも関連性を持つ。

2.2 無声音と有声音

無声音と有声音は、発生する音量の違いによって外界と直接的な対応を持つ。例えば、(1)にある擬音語は、戸をたたく音や鐘の鳴る音の大きさの違いを反映する。「とんとん」という場合、戸は軽くノックされているのに対して、「どんどん」という場合、戸は大きな音を出しており、戸は力強くたたかれている様子がイメージされる。ここから、無声音と有声音は、(2)のような現象と対応を持つことがわかる (田守 2002:139)。

- (1) a. {とんとん、どんどん} と戸をたたく
- b. {かんかん、がんがん} と鐘を鳴らす
- (2) a. 無声音：音量小 b. 有声音：音量大

また、自然界の音量は、そういった音にもなう出来事や事物と相関することから、(3)のように物体の大きさや数量を表わすこともある。例えば、「ころころ」と転がる玉は軽い小さな玉であるのに対し、「ごろごろ」と転がる玉は重い大きな玉であろう。また「ばらばら」とこぼれる豆は少ないのに対して、「ばらばら」とこぼれる豆の量はかなり多いと感じられる。これらをまとめると (4) のようになる (田守 2002:139)。

- (3) a. {ころころ／ごろごろ} と玉を転がす
- b. {ばらばら／ばらばら} と豆をこぼす
- (4) a. 無声音：小さな物、軽量、少量
- b. 有声音：大きな物、重量、多量

さらに、無声音と有声音は「清音」と「濁音」と呼ばれることにも象徴されるように、日本語の場合、評価的な判断と対応することが多い⁷。一般に、無声音は肯定的な現象と対応し、有声音は否定的な現象と対応する。例えば、「きらきら」に対して「ぎらぎら」は、真夏の太陽が照りつける様子を表わし、「しっとり」に対して「じっとり」は、過度の湿気がある否定的な状態を表わす (田守 2002:143)。

- (5) a. {きらきら／ぎらぎら} と光っている
- b. {しっとり／じっとり} とぬれている

⁶ 母音のなかでエ (/e/) は、ペコペコ (謝る) やペラペラ (喋る) のように否定的な行為や出来事を表わす音声として用いられる (Hamano 1998)。また、こういったエの象徴的意味は、「エー」のような不快な感情を表わす感動詞にも共通して継承されている。

⁷ 濁音の持つ否定的なニュアンスは、オノマトペ以外にも広がりを見せており、「ふれ:ブレ」や「さま:ザマ」「はれる:パレル」等の事例がある (鈴木 1962)。

- (6) a. 無声音：清音 →肯定的な出来事や状態
 b. 有声音：濁音 →否定的な出来事や状態

以上で観察したのは、無声音と有声音という単純な対立であるが、そこにはわれわれの聴覚に与える印象が大規模なものか、小規模なものかという対立軸がある。日本語では、こういった規模の違いを象徴的に表わす手段として、「音量」（あるいは「共鳴度」）の対立をなす有声音と無声音に写像したということになる。今後も、無声音と有声音以外に広く共感覚という観点からこのような聴覚的印象の持つ効果が考察されることを期待したい。

3. オノマトペと構文効果

個々の母音や子音が音節や形態を構成する際、すわなち、それらが全体としてまとまりをなしたとき、個々の素性には還元できない象徴的な意味を生じさせる。例えば「ころころ」という基本形を持つオノマトペは、他にも「ころっ」「ころり」「ころん」のような異形態を持つ。これらは認知言語学の観点からは、それぞれが構文文法のいう「構文」的な価値を持っており、意味的には動詞の事象構造やアスペクトに対応する。

3.1 構文的音象徴：事象構造⁸

日本語のオノマトペは、CV形（子音＋母音）を基本形とするものと、CVCV形を基本形とするものがあるが、なかでも最も多いのは「ころころ」のようなCVCVの音声を二度くりかえすABABを基本形とするものである（Hamano 1998、田守・スコウラップ 1999）。例えば、「ころころ」は「ABAB」を基本形とし、「AB」に特殊音等を付加した「ころり」「ころっ」「ころん」などの多様な派生形を持つ。

- (7) おむすびがころころ（と）ころがる
 (8) a. おむすびがころっころがる
 b. おむすびがころりころがる
 c. おむすびがころんころがる

また、アスペクトという観点からみると、「ABっ」「ABり」「ABん」は、運動の様態、特に動きのやささを表わす⁹。例えば、次のような場合は、「ABっ」が自然であり、「ABり」はすこし不自然である。これは、出来事が瞬時的に変化することを表わすために、よりはやい動作を表わす「ABっ」が選択されるためであろう。ここから、二つの派生形は(10)のような特徴を持つといえる（田守・スコウラップ 1999: 27）。

- (9) a. {からっ、?からり、*からん} と空が晴れた
 b. {くるっ、?くるり、*くるん} と振り向いた
 c. {ころっ、?ころり、*ころん} と忘れていた

⁸ Waida (1984) は、「構文」という言い方は用いていないが、ABAB型のような日本語のオノマトペが持つ特有の形態をオノマトペ標識と呼んでいる。

⁹ これらの派生形は、「ABAB」のような反復的な運動を表わすものではなく、一回性の出来事を表わす。したがって、「たくさんのおむすびが {ころっ、ころり、ころん} ころがった」のような表現となじまない。ただし、「一度に」といった表現を付加すれば可能である。

参考) からりと晴れ渡った空

- (10) a. ABっ：はやい動作 b. ABり：おそい動作

また、「ABん」は動作の進行ではなく、結果的な状態を表わすという特徴がある。例えば、「ABAB」の形式は(11a)のように進行相を表わすのに対して、「ABん」は(11b)のように結果相を表わす(Cf. 田守・スコウラップ 1999:137,138)。この場合、「ころがっている」という動詞だけでは、それが進行相を表わすのか、結果相を表わすのかが不明であるが、オノマトペ副詞を付加することでアスペクト的な対立がより明示的になる¹⁰。

- (11) a. おむすびが ころころと ころがっている
 b. おむすびが {ころん、?ころり、??ころっ} と 転がっている

参考) 木が {ぽつん、*ぽつり、ぽつっ} と 立っている

- (12) a. ABAB：進行相 b. ABん：結果相

3.2 アマルガムと統語構造

このようにオノマトペは、構造的な形式に従い、異なる出来事を象徴的に表わす。認知言語学の観点からは、これらは形式と意味が統合された「構文」として機能しているものと見ることができ。またこれと同様に、基本的な事象構造を示すものではないが、「はっきり」「すっきり」「くっきり」「ぽっきり」「めっきり」等の表現は、すべて「-きり」という構成素を持っており、意味的にも「完全」または「完了」といった現象を表わす。

また、構文文法の見解に立てば、オノマトペの新奇用法の効果を説明することもできる。例えば、「春の海ひねもすのたりのたり哉」という蕪村の俳句における「のたりのたり」は「のろのろ」と「ゆったり」という両方の要素のアマルガムと考えられる。また、中原中也はぶらんこが揺れる様子を「ゆあーん、ゆよーん」という擬態語を用いて表現したが、この場合も、「ゆあーん」は「ゆらり」と「ふわーん」の融合とみなすことができる¹¹。

最後に、「構文」として分析されるもうひとつの現象として、オノマトペが要求する接尾辞「と」「に」の違いに注目してみよう。すべての擬音語・擬態語がこれらの接尾辞をとるわけではないが、これらの接尾辞が用いられた場合、「と」は様態副詞として事態が進行中であることを、「に」は結果副詞として事態が結果的な状態にあることを表わすという傾向がある(仁田 1983、西尾 1988 等)。

例えば、「ぴかぴか」という表現は副詞辞として「と」をとる場合と、「に」をとる場合で異なる状態を表わす。「ぴかぴか(と)」は「ひかる」という出来事の様態を表わし、「きらきら(と)」と類似の意味を表わすのに対して、「ぴかぴかに」になると、「みがく」という出来事の結果の状態を表わし、「つるつるに」と類似の意味を表わす(田守 2002: 52)。これらから以下のような現象が説明される。

¹⁰ 田守・スコウラップ(1999)では、瞬時性や共鳴、反復といったかたちでまとめられており、ここでいう動詞アスペクトの用語で規定はされていない。

¹¹ こういったアマルガムの多様性については、田守(2002)が宮沢賢治のオノマトペの使用に関して興味深い考察を行っている。

- (13) a. びかびか {φ、と、?に} ひかる
b. きらきら {φ、と、?に} ひかる
参考) つるつる {φ、と、?に} ひかる →すべる
- (14) a. びかびか {? φ、?と、に} みがく
b. つるつる {? φ、?と、に} みがく
参考) きらきら {に、?と、? φ} みがく →かざる

4. オノマトペ：身体的言語

苧坂 (1999) は、心理学の観点から、オノマトペの特徴を行為者が実際に外界の事物を見たり、聞いたり、触ったりといったアクションと関連して知覚される「アクティブな認識の機能」を表わす表現であると特徴づけている。例えば、「力強くにぎる」ことを、擬態語を用いて「ぐつとにぎる」ということもあるが、前者に比べて後者は、身体的な動きが認識されるという印象がある。ここでは、このようなオノマトペの持つ言語の身体性という特徴を考察する。

4.1 オノマトペと言語獲得

小林 (1997) は、発達心理学の観点から幼児による語彙獲得の研究を行っており、日本語の語彙獲得において、オノマトペの使用が重要であると主張している。例えば、子どもはボールやハンマー、ブラシなどの人工物の名詞を学習するまえに、「ポーン」「トントン」「ゴシゴシ」といったオノマトペを使用する。そこで重要なのは、これらのオノマトペが特定の動作と結びついた身体化された言語であるという点である。

子どもは「ボール」という名詞を学習するまえに、まずボールを「投げる」「転がす」といったある種の特別の操作を通して身体的にボールという事物を認識する¹²。次に、育児語として、そういったアクションに添えて、養育者が「ポーンしようね」のような発話をすることで、そういったアクションとオノマトペが協調的にボールという事物の理解を促進する。そして、最後の段階で「ポーン」に置き換わるものとして「ボール」という語が獲得されるわけである。

このようにオノマトペは特定のアクションと密接に結びついた身体的言語であり、人工物だけでなく、他にも「はい、ポイしてね」「なでなでしようね」のような動作を表わす際にも、養育者はこれらの表現を頻繁に使用する¹³。最近の研究では、このようにしてオノマトペが、子どもの言語発達を促進する言語装置として使用されることを「音象徴ブートストラッピング」と呼ぶ学者もある (今井, 針生 2007:151)。

また小林は、ここで得た知見を実証するため、次のような心理実験を行っている。最初に、以下の左図のような物体を幼児に提示し、これを子どものまえで「これはムタよ」と命名する (このとき「ムタ」という語は子どもの語彙に存在しない)。次に、ある子どものまえではまるいムタを転がし、ある子どものまえでは透明なムタを透かすという操作を行う。その後、この

¹² 小林はこういった人工物に対する動作を特殊的操作と呼び、あらゆる事物に対して行なう「なめる」「にぎる」といった普遍的操作と区別している。

¹³ 大人の言語でも、電子レンジで「チンする」や、呼び鈴を押すことを「ピンポン」というなど短絡的な表現としてオノマトペが用いられることがある。

二組の子どもに、以下の二つの物体 A と B を提示し、「ムタはどっち？」と尋ねる。

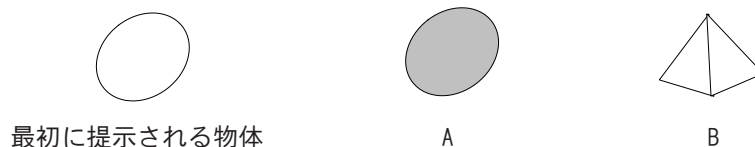


図2. ムタはどっち？

すると、前者の子どもはまるい物体 (A) を選択したのに対し、後者の子どもは透明な物体 (B) を選択した。つまり、子どもは大人が提示した人工物の機能や用途を認識しているのであり、ムタを転がした場合は、形に注目して色を無視し、反対にムタを透かした場合は、色に注目して形を無視するという範疇化を行っている。ここから小林は、語彙学習において、子どもは事物の知覚的特徴だけでなく、事物との身体的な関わりが重視されると主張している。

以上を生態心理学の観点からまとめると、子どもは人工物の概念を獲得するまえに、人工物に対してどのような操作が可能かという行為のアフォーダンスを知覚しており、そういったアフォーダンスの知覚を支えに人工物の意味が獲得される。その際、オノマトペはそういった特殊な操作を指示する表現として養育者が与えるもので、子どもはそういった養育者の支援によってより円滑に言語を獲得していくということになる。

4.2 からだ的思考と分析的志向

喜多 (2005) は、外界の出来事を捉える概念化の方略＝思考パターンとして、外界の出来事を分析的に捉え、それらを言語によって命題的に表現する「分析的思考」と、言語以前のいわゆるからだでわかるという理解のモードとして、「からだ的思考」という二種類の思考のモードがあるとし、これら二つのモードが情報処理上、並列的に働くことで事態が総合的に把握されると述べている。

例えば、日常的な生活におけるからだ的思考の経験として、目の前のボールを握れるかどうか、あるいは、となりの石垣をまたぐことができるかどうかといった、その場の身体的な知覚は命題的なものではなく、身体によって直接に知覚されるという¹⁴。これは、生態心理学の用語で述べると、それぞれボールや石垣に対する行為のアフォーダンスが知覚されているということになる。

喜多は、こういったからだ的思考は、身体的な動作や運動だけでなく、表象的な手段とみなされているジェスチャーや言語にも存在すると指摘し、擬音語や擬態語といったオノマトペ表現は、外界を分析的に「いつどこでだれがなにをどうした」といったかたちで表わすのではなく、状況の全体を“生まのまま”の印象として捉えるものであると述べている。その意味でオノマトペは言語的な概念化以前の段階にある表現といってもいいだろう。

¹⁴ からだ的思考は、自転車に乗る等、言語的に説明困難な行為を可能にするものであり、宣言的ではなく、手続き的に記憶されることになる。

また、以下の物体を分析的な言語で表わすことはかなり難しいのではないだろうか。ただ、われわれは、このようなかたちを言語で表わせないからといって、全く理解が成立していないのではなく、何らかの異なるモードによって把握している。このときに働くのが、からだ的思考であり (ibid. :121)、これをあえて言語によって表現するならば、「によきとした物体」のように擬態語で表現されるであろう。



図3. 一言で表現できない形状 (喜多壮太郎 (2002) 『ジェスチャー』 金子書房より)

さらに喜多は、オノマトペ表現は、他の動詞や形容詞のような語彙的な概念と異なり、それらを用いるとき、何らかの身体的な運動=ジェスチャーをとこなうことを注目している。例えば、人が走ってきて「バーンとドアにぶつかった」という場合と、「勢いよくドアにぶつかった」という場合をビデオなどに収録して観察すると、前者の場合、両手を打ち鳴らすような動作が現れることが多いという。

このような観察から示唆されるのは、オノマトペは、言語的に外界を「表象」するものではなく、身体によって知覚された出来事を直接的に「表出」するということである。喜多は、こういったことから、分析的な言語とオノマトペ表現は、同一の出来事を異なる思考のモードで組織化するものであり、これらが協調的に働くことで、われわれは外界の情報をより適切に理解することができるという述べている。

5. オノマトペ：全体的言語

オノマトペは分析的言語に比べて、単独で具体的な場面を描写する能力を備えている。例えば、「ざあざあ」と言えば、それだけで雨が激しく降っていることを、「こんがり」と言えば、それだけでパン等がよい加減に焼き上がることを表わす。言い換えると、オノマトペは、事態を総合的に捉える全体的言語という性格を備えているといえる。ここでは認知言語学がいうカテゴリー化という観点から、オノマトペの持つ状況喚起力を考察する。

5.1 オノマトペと事象の知覚

われわれは日常生活のなかで音を聞くときに同時に出来事を聴いている (Garver 1993)。ボタンとドアが閉まる、ドサッと荷物を下ろす、バシッと水がこぼれるとき、われわれは音と同時に出来事を聴いている。だれもいない室内で突然ガサッと音がすると不安になるが、風が吹きぬけたこと、あるいはかごのなかの鳥が動いたことなどがわかるとほっとするといった経験はだれもが思いあたるであろう。

これは、人間がつねに外界の音を何らかの「出来事」として知覚しているからであるといえる。ものがこわれる場合も何らかの音を伴い、逆にわれわれは音を聞くことで、いまなにかがこわれたということを知る。例えば、ブチッという音からはロープが切れたことを、パリンという音からはコップが割れたことを、ポキッという音からは木の枝が折れたこと等を知覚することができるだろう。

このとき、われわれは音から「破壊」という出来事だけでなく、そういった出来事に関わる対象物の物理的な属性（形状や材質）を同時に知覚している。例えば、パリンと割れる物体は、コップやガラスのように板状の物体で、かつかたいものといっていいただろう。このような事実に着目すると、日本語の破壊音は、次のようなかたちで、事物を間接的にカテゴリー化しているということに気づく¹⁵。

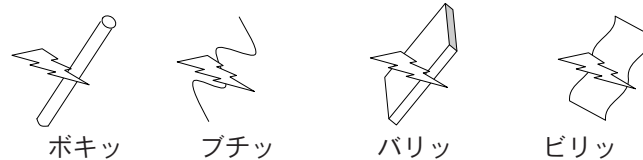


図4. 破壊音によるカテゴリー化

先に小林が、人工物がその形状や機能により、人間の身体と相対的に可能な行為を特定化することを示したように、これらの破壊音の存在は、われわれが自然界の音から可能な事象を特定化する能力を持っていることを示唆する。生態心理学の観点に立てば、こういったカテゴリーの存在により、われわれは環境のなかにある行為のアフォーダンスだけでなく、事象のアフォーダンスを知覚しているということになる。

つまり、ボキッと「折れる」のは細長くかたい棒状の物体であり、ブチッと「切れる」のは細長く柔かい紐状の物体であることを認識している。同様に、バリッと「割れる」のは平たくかたい板状の物体であり、ビリッと「破れる」のは平たく柔かい布状の物体であることが理解されている。これらはそれぞれの物体が備える事象の可能性（事象のアフォーダンス）であり、われわれはこういった環境の構造を利用し、外界の出来事を認識している。

5.2 オノマトペと行為の知覚

人間は、生物体の運動知覚に優れており、動作や運動からそこに意図や感情を読みとる。Johansson (1973) は、数十の光点を人間の身体につけ、光点だけを観察者に提示し、どれくらいの情報が知覚されるかを実験している。被験者は、光点が動きだしたとたん、無意味な光点の羅列が人間の身体についていることだけでなく、その人物が男性か女性か、また何歳くらいか、さらにどんな気分で動いているかなどを知覚した。

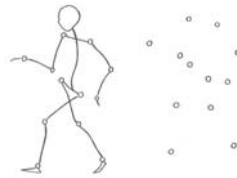


図5. 生物体の運動 (C.F. Michaels and C. Carello (1981) Direct Perception. Prentice-Hall より)

¹⁵ こういったカテゴリー化を支える弁別素性は、日本語では「個」「本」「枚」など、日本語の形状類別詞（松本1984）や、「折る」「切る」「割る」「破る」などの破壊の動詞（藤井2005）にも体系的な区分として存在している。

また Heider & Simmel (1944) は、われわれが幾何学図形の運動を提示し、被験者がそれらの運動を擬人化し、そこに意図や欲求を読み込むことを観察した。これらの研究は、その後チンパンジーの行動観察や自閉症児の障害研究により、心の理論として発展的に継承されている (Baron-Cohen 1995、子安 2000、Premack 2002 等)。ここでは、生物体の運動知覚がオノマトベにも反映されることを観察する。

歩行の擬態語として、乳幼児がたよりなく歩く「よちよち」、年寄りが倒れそうに歩く「よろよろ」、病人が揺れながら歩く「ふらふら」のような表現がある。これらはすべて運動の様態を表わすものであるが、同時にそこからその主体がどういった属性を持った対象なのかが推測される。また「しゃなりしゃなり」など、女性が気取って歩く様子を表わす擬態語や、「のっしのっし」のように巨大な存在が威厳をもって歩く様子を表わす擬態語もある (室山 1972)。

また人間の動作や運動は、物理的な事物の運動と異なり、何らかの意図や感情の発露、またはその実現として理解される傾向がある。例えば、「とぼとぼ」という擬態語は、何かに落胆して家路に向かう様子を表わす。また、「ぶらぶら」は無目的に歩く様子を、「つつか」はなにかの用事がある目的地向かって勢いよく歩いていく様子を表わす。さらに「のこのこ」は、今頃やってきてももうおそいといった時期的な状況や判断を表わす。

これらの擬態語は、歩行の様態を表わすだけでなく、歩行に関わる状況の全体を表わす。その際、われわれは歩行の様態から、その人物の属性や状態、意図や感情などを読み取っているものであり、これらの擬態語はそういった状況の全体に言及する表現であると言える。認知言語学の観点からこれらの擬態語を表示するならば¹⁶、「よちよち」は主体が、「ぶらぶら」は目的が、「とぼとぼ」は感情が擬態語に語彙化されたものとして表示することができる¹⁷。

6. 本稿のまとめ

本稿は、認知言語学の観点から、日本語のオノマトベの特徴を分析した。第一に、オノマトベが示す形式と意味の類像性を、共感覚現象及び構文効果として分析した。これらの分析により、従来までの音象徴現象には、音声的な特性に基づく素性的音象徴と、形態的・統語的な構文的音象徴の二種があることを示した。第二に、擬音語・擬態語が持つアクティブな認識の機能を、ジェスチャー研究や語彙獲得の研究を参照し、言語の身体性として整理し、オノマトベの持つ情報処理的な意義を指摘した。第三に、オノマトベの状況喚起力を、事象の知覚と行為の知覚という二つの現象として考察し、最後に認知言語学に基づく分析法を提案した。

最後に、今回触れることができなかつた言語現象として、オノマトベによるメタファー現象とそれを可能にする概念メタファーやイメージ図式の問題を挙げておく。例えば、「じっくり」は根菜などを煮込む以外に、「じっくり考える」といった表現が可能であり、その際、アイデアは食べ物であるという概念メタファーが背後にある可能性がある。また、「ぴしゃり」は窓や戸を閉める場合にも用いるが、無理な提案を断る場合などにも用いる。このとき二つの表現

¹⁶ 移動動詞の語彙化に関しては、Talmy (1985) や松本 (1997) 等を参照。

¹⁷ 擬音語や擬態語は心理的にはそれ以上の分析=還元が困難なクオリアに言及するものであり、心理学では意味微分法による計量的な研究が一般的であった (中野 1978、楠見 1988、丹野 2005)。しかし、ここで示すような語彙化による分析を進めることで、これまで心理学の観点からは分析が難しかった感性の表現に新たにカテゴリカルな意味を認めていくことが可能となる。

を結ぶのは「遮断」というイメージ図式であろう。今後、認知言語学のメタファー研究の新たな領域として、このような観点からもオノマトペに関心が向けられることを期待したい。

参考文献

- 阿刀田稔子・星野和子(1993)『擬音語・擬態語使い方辞典』東京：創拓社。
- Baron-Cohen, Simon (1995) *Mindblindness*. Cambridge: MIT Press. (長野敬(他訳)(1997)『自閉症とマインド・ブラインドネス』東京：青土社。)
- 藤井洋子(2005)「*骨をこわす vs. break the bone: 認知カテゴリーと文法項目のタイポロジー」井出祥子, 平賀正子(編)『異文化とコミュニケーション』156-169. 東京：ひつじ書房。
- 深田 智・仲本康一郎(2008)『概念化と意味の世界: 認知意味論のアプローチ』東京：研究社。
- Garver, William W. (1993) "What in the World Do We Hear?: An Ecological Approach to Auditory Event Perception." *Ecological Psychology* 5(1): 1-29.
- Hamano, Shoko (1998) *The Sound-Symbolic System of Japanese*. Stanford: CSLI Publications.
- Heider, Fritz and Marianne Simmel (1944) "An Experimental Study of Apparent Behavior." *American Journal of Psychology* 57: 243-259.
- 飛田良文・浅田秀子(2002)『現代擬音語擬態語用法辞典』東京：東京堂出版。
- Hinton, Leanne, Nichols Johanna, Ohara John J. (eds.) (1994) *Sound Symbolism*. New York: Cambridge University Press.
- 堀井令以知(1996)『感性の言語学』東京：近代文芸社。
- 今井むつみ・針生悦子(2007)『レキシコンの構築: 子どもはどのように語と概念を学んでいくのか』東京：岩波書店。
- Johansson, Gunnar (1973) "Visual Perception of Biological Motion and a Model for its Analysis." *Perception and Psychophysics* 14(2): 201-211.
- 喜多壮太郎(2002)『ジェスチャー: 考えるからだ』東京：金子書房。
- 小林春美(1997)「語彙の獲得: ことばの意味をいかに知ることか」小林春美・佐々木正人(編)『子どもたちの言語獲得』85-109, 東京：大修館書店。
- 子安増生(2000)『心の理論』東京：岩波書店。
- 楠見 孝(1995)『比喩の処理過程と意味構造』東京：風間書房。
- Lakoff, George (1974) Syntactic Amalgams. In *Papers from the 10th Regional Meeting of Chicago Linguistic Society*, 321-334. Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Langacker, Ronald W. (2000) A Dynamic Usage-Based Model. In Michael Barlow and Suzanne Kemmer *Usage Based Model of Language*, 1-63. Stanford: CSLI Publications.
- 松本 曜(1991)「日本語類別詞の意味構造と体系: 原型意味論による分析」『言語研究』99: 82-106.
- 松本 曜(1997)「空間移動の言語表現とその拡張」中右実(編)『空間と移動の表現』125-230, 東京：研究社。
- McGurk, Harry and MacDonald, John (1976) Hearing lips and seeing voices. *Nature*, 264: 746-748.
- Andrew N. Meltzoff and Richard W. Borton (1979) Intermodal matching by human neonates. *Nature*,

282: 403-404.

室山敏昭 (1972) 『『人の歩く姿に関する擬態副詞語彙』の意味構造についての一試論』『国語学』90: 25-41.

中野 洋 (1978) 「擬声語・擬態語のイメージ：意味微分法による分析」『計量国語学』11 (7): 312-372.

仁田義雄 (2002) 『副詞的表現の諸相』東京：くろしお出版.

西尾寅弥 (1988) 『現代語彙の研究』東京：明治書院.

苧阪直行 (編) (1999) 『感性のことばを研究する：擬音語・擬態語に読む心のありか』東京：新曜社.

小野正弘 (編) (2007) 『日本語オノマトペ辞典』東京：小学館.

大堀壽夫 (1991) 「文法構造の類像性」『記号論研究』11: 95-107.

Premack, David and Ann Premack (2003) *Original Intelligence: Unlocking the Mystery of Who We Are*. New York: McGraw-Hill.

Ramachandran, Vilayanur S. (2003) *The Emerging Mind*. London: Profile Books. (山下篤子 (訳) 『脳のなかの幽霊、ふたたび』東京：角川書店.)

Saussure, Ferdinand de (1916) *Cours de Linguistique Generale*. Lausanne: Payot. (小林英夫 (訳) 1940 『一般言語学講義』東京：岩波書店.)

鈴木孝夫 (1962) 「音韻交代と意義分化の関係について：所謂清濁音の対立を中心にして」『言語研究』42: 23-30. (鈴木孝夫『鈴木孝夫 言語文化学ノート』81-94, 大修館書店. に再録.)

丹野眞智俊 (2005) 『オノマトペ (擬音語・擬態語) を考える：日本語音韻の心理学的研究』京都：あいり出版.

佐々木正人 (1994) 『アフオーダンス』東京：岩波書店.

Talmy, Leonard (1985b) Lexicalization Patterns: Semantic Structure in Lexical Forms. In: Timothy Shopen (ed.) *Grammatical Categories and the Lexicon*, 57-149. Cambridge: Cambridge University Press.

田守育啓 (2002) 『オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ』東京：岩波書店.

田守育啓・ローレンス・スコウラップ (1999) 『オノマトペ』東京：くろしお出版.

Tomasello, Michael (1999) *The Cultural Origins of Human Cognition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (大堀壽夫 (他訳) 2006. 『心とことばの起源を探る』東京：勁草書房.)

Tomasello, Michael (2000) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. (辻幸夫 (他訳) 2008. 『ことばをつくる：言語習得の認知言語学的アプローチ』東京：慶應義塾大学出版会.)

山口仲美 (編) (2003) 『暮らしの言葉 擬音・擬態語辞典』東京：講談社.

山梨正明 (1988) 『比喩と理解』東京：ひつじ書房.

山梨正明 (1995) 『認知文法論』東京：ひつじ書房.

山梨正明 (2009) 『認知構文論』東京：大修館書店.